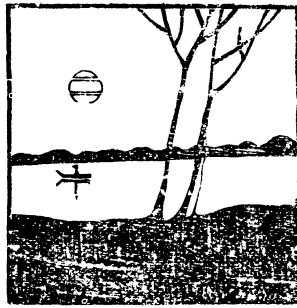


した罪惡的な至純ならざる涙を否定したい。
涙は神聖であり、侵すべからざるものである。至純でなくてはならない。眞の感情の發露として表はるべきものでなくてはならない。(大正十三、二、二七稿)



静寂を破る響

吉 益 正 光

にはかに眼界が開けたと思つたら最早中腹に迄來て居た。まだ降りたらぬのか灰色の雲は空一杯になつて居る。昨夜聲なく降つた雪は今日この墟落を玉山銀臺と化せしめた。

太陽は西嶺に度り、ひやかな斜陽は時々灰色の雲をとほして、郡山を照す、實に静寂だ。

騒しい物音は一つも聞えない。そして目に入るものは冬枯のさびしき山々、峯々々、それを被ふ清淨の雪や、夕飯を急ぐ煙だけである。子供等も遊びつかれたか、家路へ、三々五々、依々として去つた。廣い天地何の響もしない。沈寂を破つて木鐘の音が山下より起つた。嗟夫、ゆかしき木鐘の音、それは今猶、聖祖時代の清淨を語るが如く聯々として、つゞいて居るのだ。此土は安穩にして天人常に充滿せるを狂子に知らざんが爲に朝に、夕に、響いて居るのだ。嗟夫幸福なのは我等だ、そして草木だ。

終日、實相眞如のみ法を貪り。草木によられし聖者のみあとを慕ふ。廣大無邊な、み佛の慈悲も我等には

にはこの黒子の地にのみ與へられて居るのであらうかと疑はれる。

太陽は西に没した。暗い暗い夜の幕は刻一刻、此山里を襲ふ。嗚呼夜が來た。さびしい夜が來た悵然たる折しも久遠の梵鐘は一聲。この山里を震はした。

——(身延ホテルの丘上にて)——



我が書齋

二宮龍巖

與へられた室の一隅は私の書齋だ。單調と無味を柔げる爲に机上に小さな一つの花瓶に一輪の秋菊の花を挿して、それで私は充分に此の書齋を愛する事が出来る。悲しい時にも嬉しい時にも私はこの机の前にごつかと坐る、と挿した秋菊が私の眞の友になつて慰めて呉れる。二三日前に室の入口に『來者不拒之去者不追之』と書いた紙片を貼りつけて見た。この書齋が『私のものだ』こう思ふとき室に對する強い愛著が起つてくる。(大正一二、一〇、九稿)



凝視

今泉智旭

みるまゝにやまかせあらくしぐるめり都も今は夜さむなるらむ。